

〈書評〉

マリオ・バルガス＝リョサ著『都会と犬ども』

杉山晃 訳
(新潮社, 1987年)

I

本書は、すでに邦訳のある『緑の家』(1966), 『ラ・カテドラルでの会話』(1969), 『パンタレオン大尉と女たち』(1973)などの作者、ペルーのマリオ・バルガス＝リョサの最初の長編小説である。1963年に発表されるや、衝撃的なストーリーと斬新な手法で多くの批評家や読者を瞠目させ、その惜しめない賛辞を受けて、一躍バルガス＝リョサの名を文学界に知らしめた。

60年代に入って、エルネスト・サバトの『英雄たちと墓』(61), フアン・カルロス・オネッティの『造船所』(61), アレホ・カルペンティエールの『光の世紀』(62), カルロス・フエンテスの『アルテミオ・クルスの死』(62), フリオ・コンタサル『石蹴り遊び』(63)等の優れた作品が矢継ぎ早に発表され、すでに〈ブーム〉と呼ばれる活況が始まっていたラテンアメリカ文学の担い手達の中に、バルガス＝リョサはこの『都会と犬ども』を引っさげて参入したのである。この作品は、スペインでは〈ブレベ図書賞〉、〈スペイン批評賞〉を受賞して順調に版を重ね、外国語にも次々と翻訳されていった。

しかし、彼の国ペルーにおいては、発表と同時に大変なスキャンダルを巻き起こした。というのも、小説の舞台になっているレオンシオ・ブラド

士官学校は、1950年から2年半にわたって作者が寄宿生活を送った実在の学校であり、当時の苦い経験が小説の素材となっていたからである。内容も、生徒達の暴行、飲酒、喫煙、賭博、カンニングが扱われるなど多分に暴露的であったために、軍や一部の保守勢力はこれを軍と学校に対する明らかな誹謗中傷の書だと見なして、当のレオンシオ・プラド中学校の校庭で1千部以上を焼却処分した。また、リマ市内では作品に抗議するデモが組織されるなど、支配階級の困惑は相当なものであったらしい。作者の自伝的要素に基づき、学校や街も実名で現れているこの作品は、その内容からペルー軍部の腐敗を攻撃することを目的に書かれたと受取られるかもしれない。しかし慧眼の読者なら、作者バルガス＝リョサの意図するところはそうした低次元の暴露的なものではなく、リマ、ひいてはラテンアメリカの都会にあって苦悶する若者達の姿、その普遍的な状況を現実深く根ざした形で描き出すことであった、ということに気づくであろう。

物語はレオンシオ・プラド士官学校を舞台に展開する。寄宿制のレオンシオ・プラドにはペルー各地から生徒が集まってくるが、その人種・出身地・階級などはさまざまで、さながらペルー社会の縮図を見るようである。そこでは偏見から生まれる対立や敵対があり、また軍隊式教育の場ということでマチズモが一般社会より一層強力に幅を利かせている。新入生は上級生から「犬っころ」と呼ばれ、屈辱的なしごきの儀式を通過しなければならぬ。

「奴隷と一緒に洗礼のしごきを受けた少年の顔をおぼえていない。小柄だったから、最終組の生徒だろうと思った。少年の顔は恐怖でゆがんでいた。上級生の声が止むや、その小柄な少年は吠え出した。そして口から泡を吹きながら奴隷におそいかかった。奴隷はいきなり狂犬の牙が肩にくいこむのを感じた。すると全身が反応して、彼もはげしく吠え立てながら、相手にかぶりついた。歯をむきだして纏れあっているうちに、自分のからだに剛毛でおおわれ、口のまわりがするどくどくがって、尻尾

が背中の上でムチのようになっているような錯覚におちいった。」(p. 53)

「裸にされて、サッカー場のまわりを背泳ぎさせられた。それからふたび4年生の寮舎に連れもどされて、ベッドをいくつもつくられた。クローゼットの上で歌って、踊った。映画俳優のものまねもした。軍靴を何足かみがいた。汚れたタイルを一枚舌でべろべろ拭いた。枕を相手に自慰をおこなった。小便をのんだ。すべてが激しい目まいのように彼をおそい、気がついたときには、自分の寝台に横たわっていて《こんなところからぜったいに逃げ出してやる》と一途に思っていた。」(p. 53)

妻まじいしごきの儀式を通過した「犬っころ」達は、暴力がすべてを決する弱肉強食のこの環境で生き延びるには、恐れや不安を他人に気取られぬよう仮面をかぶって身を守るほかはない、と知るに至る。士官学校にいる3年の間に、彼らは盗み・賭博・鶏姦・暴行・喫煙・飲酒・カンニングなどを経験し、精神の荒廃とともに、偽善的で残酷な大人になる術を体得していく。

最上級生の組織の生徒達は、ある時、化学の試験問題を盗もうと企ててダイスで決めた結果、カーバという若者がその実行に当たることになる。計画はうまく行ったかに見えたが、カーバは問題を保管した部屋に侵入する際に窓ガラスを1枚割ってしまう。そこから事件が発覚し、当局は犯人が見つかるまでは5年生全員を外出禁止にするという処分を申し渡した。内気で同級生から「奴隷」と呼ばれているリカルド・アラナは、女友達のテレサに会いたい一心から当局にカーバが犯人であると申し出て、外出を許可される。カーバは放校処分になる。同級生のためにラブレターの代筆をしたり、エロ小説を書いて小遣い稼ぎをして「詩人」と呼ばれているアルベルトは、アラナの唯一の話し相手であったが、彼はアラナが密告したのだと直感する。一方、ジャガーをリーダーとする組織のメンバーは密告者をつきとめようと躍起になっていた。そんな矢先、野外演習でアラナは頭に銃弾を受け、数日後に死亡する。学校側はアラナ自身の銃の扱い方の

拙さによる事故死だと発表するが、アルベルトは組織のリーダーであるジャガーがカーバの復讐をするためにアラナを撃ったと確信して、指導教官のガンボア中尉に報告する。アルベルトは、ガンボア中尉にそれを報告する際に、生徒達が無断で寮舎に酒を持ち込んでいることや、喫煙、賭博、盗みなどの事実もあわせて告げる。ガンボア中尉は寮舎を捜索して、アルベルトの指摘を確認し、当局に事件の徹底的究明を求める。しかしながら自らの経歴に傷がつくのを恐れた上官達は、ガンボアの申し入れに耳を貸さず、アルベルトの懐柔にかかる。上流階級の出であるアルベルトは、家名に傷がついてもいいのかと脅されて、やむなく報告を撤回する。あくまで職務に忠実であろうとするガンボアは山間の辺地に左遷されることになる。ガンボアの左遷を知ったジャガーは、自分がアラナを撃ったとガンボアに告げるが、ガンボアはそれには取り合わず任地へ赴く。ジャガーが本当にアラナを撃った犯人かどうかはジャガーの言葉以外には確認すべき手立てがない。卒業後、アルベルトはレオンシオ・プラドでの体験も女友達テレサのことも忘れて、上流階級の安逸をむさぼる生活に戻る。一方、銀行員として立ち直ったジャガーはテレサと結婚し、かつての泥棒仲間には優しいたわりの言葉をかけてやれるほどの人間になっている、というところで小説は終わる。

II

粗筋だけを見る限り、作品は大して目新しいものでないかのような感じを与える。しかし、作者バルガス＝リョサ自身が、作品の文学的価値は主題以上にその処理の方法にある、と考えるように、この作品はその構成によって優れた文学性を獲得している。

本書はI部、II部および短いエピローグから構成されている。I部、II部ともに8章から成り、それぞれの章は多いもので10節、少ないものでは1節を有し、エピローグの3節を合わせると、全体としては81節から成り

立っている。これらの節は、それぞれ場面・時・人称を異にする断片を形成し、一見したところ脈絡もなく配置されている。それゆえ、各節間の関連は非連続的で、時間・空間・視点の飛躍が見られ、最後まで読み進まないと全体の相互関係がはっきりしない。

作品全体を通しては、士官学校での出来事が中心に据えられ、過去・現在を織り交ぜて語られる。この学校での出来事を伝える部分は2つの視点から捉えられる。すなわち、三人称の客観的な叙述の節と主観的な「ボア」の内的独白の節である。三人称の節はオーソドックスな文体で外面から人物を描き出す。三人称の中に一人称の交じった形の叙述も現れるが、一人称の部分は登場人物の一人であるアルベルトによるものである。三人称の叙述部分もアルベルトの目を通してのものがかなりある上、レオンシオ・プラドから週末に外出した折の行動が明らかなのもアルベルトに関してだけである。こうした点から、アルベルトは作者の分身であるとも受取れる。実際、アルベルトの境遇は作者の少年時代のそれと一致する部分が多い。三人称の部分が生徒達の言動や生活ぶりを外側から捉えているのに対して、「ボア」の内的独白は主観的な眼で内側から彼らの心理を描出している。「ボア」の内的独白の部分は、彼の意識の流れに従って、生徒同士の会話で交わされる鋭く荒々しい言葉が奔流の如くほとばしり、罵詈雑言をまき散らす悪ガキどもの猛々しい勢いが圧倒的な喚起力をもって表出される。「おれたちは寮舎の便所でタバコを吸っていた。こら、コウモリどもめ、火を隠せ。ジャガーのやつ、トイレのなかで、しめ殺されているみたいになってやがった。おい、ジャガー、どうだい？ 出たか？ やかましい、気が散るじゃねえか、気持ちを集中しねえとだめなんだ。さきっちょはどうだい、出てきたかい？ あのデブちゃんを犯ちまおうよ、と巻き毛が言った。誰だって？ 九組のデブ公だよ、おまえもやつの尻をつねったことがあるだろ？ ジャガーめ、うなってやがる。ま、おもしろそうだけども、あいつ文句いわずにやらせてくれるのかよ？」(pp. 31-32)

この独白では、「ボア」の〈おれ〉が〈おれたち〉という集団の意識にす

りかわっては、またもや〈巻き毛〉〈カーバ〉〈ジャガー〉その他の若者の意識に変わって行く。同時に、士官学校の生徒が集団や個人で登場することで、学校の雰囲気が多声的表現でさまざまな角度から描き出される。暴力の信奉者であると同時に野良犬のヤセッポッチに心の通い合いを求める心優しい「ボア」の独白からは若者の心理の内奥がかいま見える。この「ボア」の独白は原文では難解な部分であるが、訳者の巧みな訳文が原作の雰囲気をよく伝えている。

学校での出来事の叙述の合い間には、レオンシオ・ブラド入学以前のアルベルトとリカルド・アラナのエピソードが三人称の語りで織り込まれている。彼ら2人のエピソードはともに三人称で語られていながら、「奴隷」のそれはアルベルトのものよりひそやかに静けさをたたえた文体であり、入学後の2人の生活ぶりの違いと符合する。2人のエピソードが現れる節の配列は、それぞれ時間の経過に沿っている。一方、物語のI部・II部を通じて最初から断続的に現れるモノログがある。これは、とめどない意識の流れから吐き出されるスピーディーで躍動感溢れる「ボア」の独白とは全く異なり、特定の相手に語りかけるような調子の、整然とした文体である。リカルド・アラナを想起させる孤独ではにかみ屋の少年が、女友達に寄せる好意や日々の暮らしを語るこのモノログには郷愁が漂い、詩的でさえある。作品の最後で、このモノログの主がレオンシオ・ブラド入学前のジャガーだったことが明かされると、読者は悪の権化のようなジャガーとモノログのジャガーの人物像のあまりの相違に驚くのである。

作者バルガス＝リョサが本書で用いた手法は、のちの『緑の家』や『ラ・カテドラルでの会話』においてさらに入り組んだ構成へと発展している。では、作者はなぜこのように幾つもの段階で交錯した構成を採用するのだろうか。それは、常に変化する複雑で重層的な現実を、固定したものとしてではなくあらゆる面から包括的に把握しようとするれば、一つでも多くの次元・パースペクティヴが要求されるからなのである。しかも、過去の事実や回想を現実の事実や意識の中に嵌め込むことにより、現在と過去の融

合、現在の中に生き続ける過去の提示も可能だからである。

叙述形式と作品の内容も密接にかかわり合っている。第I部と第II部は「奴隷」の死によって分けられているが、「ボア」の独白節が第I部の5回から第II部の8回、ジャガーのモノローグについても第I部の3回から第II部の9回という具合に、第II部ではモノローグの回数が増えている。これは、外面的な描写の多かった第I部から第II部へと進むにつれて、物語が徐々に各人の内面に向かって深められていくためである。さらに、エピソードの部分ではそれまで作品中に現れなかった新しい形式が用いられている。テレサと結婚して今は銀行員になっているジャガーが、昔の泥棒仲間のイゲラスと交わす会話の中に、過去に別の場所で行われた会話がオーバーラップしているのがそれである。この作品で、若者達は孤独なモノローグの中に自らを映し出していたのだが、物語の最後に至って他者に開かれた対話が現れているのは、孤立からの脱却と相互理解を志向するゆえだとは受取れないだろうか。ジャガーの科白「おれたちは友だちだ。力になれることがあれば遠慮なく言ってくれ」(p. 414)とともに。

登場人物が外側と内側の両面から光をあてられているように、小説の舞台としては外側はリマの町、内側はレオンシオ・プラドということになる。レオンシオ・プラドは外の世界である都会リマと無関係に存在しているわけではない。入学前、生徒達はリマで生活しており、現在の彼らはリマで作られたのだから、都会で暮らしていた頃の彼らの姿を現在の学校での姿と並行して描くことは、彼らの心理や行動を理解する上で重要である。生徒は各人各様に家庭内の問題や差別意識を学校に持ち込む。外部世界の矛盾がそのまま内に持ち込まれるのである。一方、士官学校内で若者達は制度化された暴力の下に教育されて軍隊精神を身につけ、力の論理を推し進める者として外の世界、都会へと送り出される。彼らには、現実の社会体制の維持強化をしてもそれを打破する力はない。外部世界と内部世界、人物の外的側面とその内面・意識の複雑な絡み合いを実際の構成面において

も重層的に表出しようとしたために、作者は本書に見られる構成と手法を試みたのである。

III

次に、主要な人物について見ていこう。

アルベルト

彼はミラフローレス地区のブルジョアの出身である。父との折合いが悪く、別居中の両親のいがみ合いを見るのにも耐えかねて、いっそ寄宿制の学校に入った方がましだと考えた結果、彼の出身では場違いと思われるレオンシオ・プラドに入学する。同じミラフローレスに住む仲間と付き合う時は言葉も丁寧でなごやかな雰囲気をつたえたお坊ちゃんだが、士官学校の門を一歩くぐると、その態度は豹変する。丁寧で上品な物腰は跡形もなく消え、辛辣で卑猥な言葉で相手を攻撃する。彼は「詩人」と呼ばれ、自分は異質な存在だと思わせて、皆から一目置かれている。暴力と狡猾さが支配する弱肉強食の学校の中で生き延びるには、腕力に物を言わせるか、アルベルトのようにイカレた振りをして他人を煙に巻いて要領よく立ち回るしか道がないのだ。アルベルトは、無防備に自分の弱さをさらけ出している「奴隷」に言う。「…おまえが臆病だってことはみんなが知ってた。なめられたくなけりゃ、ときたま殴りあわなくちゃ。でないと一生カモにされるんだぞ」(p. 22)

やがて、そんなアルベルトの心を揺るがす事件がおこる。「奴隷」の死である。アルベルトは、家名を汚す放校処分になりたくなければ申し出を撤回しろという学校当局の脅しにひとたまりもなく引き下がる。自らの訴えを引っ込める時点までは正義を信頼していた彼も、周囲の圧倒的な権威とその権威を容認する自らの意識に抗うことができない。彼はテレサもアラナも文学をも裏切って、卒業後は再び安楽なブルジョアの生活へと戻る。彼の心には何の傷跡も残りはしない。「うんと勉強して、腕のいいエンジニ

アになろう。帰ってきたら、親父と組んで仕事をするんだ。オープン・カーを買って、プールのある家に住もう。そしてマルセラと結婚して、ドン・ファンになるんだ。土曜日にはグリル・ボリーバルへ踊りに行って、あちこちへ旅行しよう。あと数年もしたら、レオンシオ・プラドに通っていたことすら忘れてしまっただろうよ」(p. 404)

リカルド・アラナ

中流階級出身の彼は「奴隷」と仇名され、学校では全くの異端者である。幼児期に伯母に甘やかされて育ったアラナは、リマで父と一緒に暮らすようになってもなかなか父親になじめない。父親は彼に男らしさが欠けていることを嘆き、厳しい軍隊式教育の士官学校に入れて、男らしさを身につけさせようとする。アラナ自身も父親と一緒にいるよりむしろという気持ちから入学を決意する。しかし、実際に入学した学校の中で、彼は他の生徒が〈男らしさ〉を誇示するための道具でしかなかった。彼は常に不安と恐怖を抱いていた。他の生徒も内面は同様なのだが、彼らは弱みを隠して見せないのに、アラナは無防備に自分をさらけ出してしまふ。確固たる自己主張も行なわない。彼に関する節の書き出しが、原文では〈Ha olvidado・・・〉(彼はすっかり忘れていた)が繰り返されるのも、彼が積極的に生きなかつたことを象徴しているかのようである。また、生徒の指導に熱心なガンボア中尉さえ、事件後、彼がどんな生徒であったか思い出せないと述懐しているところに彼の生の救いようのない頼りなさがある。結局、学校でのアラナは全くのはみ出し者として軽蔑され、虐待されて死へと追い込まれる。彼は野外演習中に頭に銃弾を受けて死亡するが、密告の仕返しに殺されたのかもしれないし、単なる事故死だったのかもしれない。そのいずれであるのかは問題ではない。彼の死は力が全てを決定する社会から落ちこぼれた人間の死を象徴していると考えた方がより重い意味を持つのではないだろうか。根強いマチズモ信奉に固執する集団が彼を殺したのである。

ジャガー

レオンシオ・プラドにおけるジャガーは暴力と悪の権化の如き存在である。しごきの儀式にも屈せず、上級生に報復すべく組織を作ってそのリーダーとなり、力によって他の生徒達の上に君臨している。ジャガーは力による支配体制を信じ、裏切りを憎む。その価値観を身をもって示し、仲間に〈男らしさ〉というものを教えたつもりになっていた。これは力を武器に自己を守らねばならなかった泥棒稼業の時代に体得したものだ。だが、彼も「奴隷」の死には大きなショックを受ける。しかも、自らの支配下にあると信じていた同級生に背を向けられ、密告者呼ばわりされて、力がすべてだという信念が揺らいでくる。強者が弱者を力づくで支配する限り、友情も信頼も生まれ得ないことにジャガーは気づく。それを契機にジャガーの中には、力の論理によって押しつぶされ疎外されて生きる人間への共感が生まれてくる。左遷される羽目になったガンボア中尉に自分がアラナを撃ったと申し出てガンボアを救おうとしたのも、ガンボアへの信頼と友情の表明であったのかもしれない。力を武器に身を守り、仮面をかぶり続けていた人物のこの変化は重要である。

ジャガーに関しては、さらに読者を驚かせる事柄が、作品の終りに用意されている。リカルド・アラナと同様、孤独ではにかみ屋の少年のモノローグが、実は入学前のジャガーのものであったことである。同級生の目を通して外から描かれたジャガーと、入学前の内から描かれたジャガーのあまりの落差の大きさに読者は目を見はる。テレサに自分の思いを打ち明けられず、泥棒の仲間に加わってはいつ捕まるかとビクビクしている小心な若者が、冷酷非情なジャガーと同一人物とは信じ難い。内気で純情な少年を凶暴な人間に変えてしまう環境の力の大きさや、一人の人間の外面と内面のずれの大きさに我々は息を呑む。若者は孤独と絶望の淵に追いやられたがために狂暴な行動に走るのである。アラナの伯母アデリーナが語る「セチューラ砂漠のキツネはね、夜になると、悪魔みたいに吠えるのよ。どうしてだと思う？ まわりがしいんとしてるのがたまらなくこわいからの。静けさがおそろしくって吠えだすんだって」(p. 13)という寓話は、狂

暴性の内に潜む不安と孤独を示唆している。

以上、アルベルト、アラナ、ジャガーという3人の若者について見てきたが、個人として描かれている彼らは、なにも特別な意識を持つ特別な人間ではない。若者に共通の心理を持ちあわせた普遍的な存在である。彼らとその心理や行動の上で示すものは、彼らの属する階級やその世界観に規定されている。

テレサ

リカルド・アラナが試験問題盗難事件の犯人を密告する原因となるテレサ。アルベルトがアラナの禁足処分中にデートをすることになるテレサ。入学以前のジャガーのモノログに登場し、ジャガーに好意を寄せられるテレサ。テレサに対する3人の接し方も、それぞれの出身階級の価値観を反映したものである。テレサは、都会においては個別の存在である3人を繋ぐ要となっている。さらに、彼女と付き合う際の3人の反応ぶりには若者特有の複雑な心理の諸相が読み取れることも事実である。一方、テレサは相手によって異なった像として浮かび上がる。アルベルトと一緒にいる時のテレサはおずおずと自信なげで、ミラフローレスの女の子達と比べるとくすんだ存在である。しかし、ジャガーのモノログに登場する彼女は、賢く、お洒落で、生き生きと自信に満ちている。彼女の場合は外面と内面の違いとして示されているわけではないが、同一人物が相手によって別人であるかのように現れる点に注目したい。

ガンボア中尉

自身の栄達を願って事なかれ主義の態度をとる軍人達の中にあって、ガンボアだけでは違っていた。上官のガリード大尉にとっては、「ガンボアの指揮を見るのがおもしろかった。ただの演習だからあんなに真剣にやる必要はないのにといつも思うのだった」(p. 190)ほど、彼は自らの職務に忠実で誇りを持っている。その良心的な生き方は生徒達から彼らなりの信頼を寄せられている。彼の信念は「秩序と規律が正義を形成する」(p. 377)、「秩序と規律は、合理的な共同生活のための第一要件である。秩序と規律は現

実を規則に合致させていくことにより得られる」(p. 377) というものであった。そしてまた、「規律なしでは、なにもかも墮落し、だめになってしまいます。わが国がこんなありさまになっているのは、規律も秩序もないからです。この国で健全さと強さを保っているのは軍隊だけです」(p. 314) と信じて疑わない。彼は、もはや効力を失った古い価値の中で良心的に生きているのであって、現実の諸問題、生徒達が引きおこす問題や反抗についてはその根源を見抜けない。秩序が回復すればすべてが解決すると考えているガンボアは、現行の法や規律を絶対のものとして信じている。彼は職務に忠実であろうとするあまり、墮落した上官の怒りをかけて左遷される。しかし、それでもなお彼は規律への信念を失わない。ジャガーが「奴隷」を撃つたと申し出た時に、「敵が武器を捨て、降参したとき、責任ある戦闘員なら、相手を撃つことはしない。(中略)アラナの死が無駄に終わらないようにがんばりなさい」(p. 393) と言ったガンボアの誠実な生き方と良心は、個人的にはジャガーを救済し得たが、社会的には何の役にも立たなかったのである。

『都会と犬ども』のガンボア中尉は、のちの『パンタレオン大尉と女たち』のパンタレオンの姿と重なり合う。そこには、職務に忠実なだけで全体的な判断力を持たない人間の哀しさが漂っている。

IV

次にレオンシオ・プラドの若者達の世界を見てみよう。彼らの行動様式を知る鍵は、第I部のエピグラフに求められよう。

「キーン ぼくらが英雄を演じるのは、卑怯者だからだ。聖者のお面をかぶるのは、悪人だからだ。殺人者のまねをするのは、人を殺したくってうずうずしているからだ。あれやこれや芝居をするのは、生まれつき嘘つきだからだ。」ジャン＝ポール・サルトル

士官学校に入ってきた彼らは、暴力による支配体制の中で、力を持つ者

が力のない者を抑圧するのは当然という論理を否応なしに身につけさせられる。加害者になるか被害者になるかの二者択一を迫られ、自らの弱みを他人に見破られないよう、仮面をかぶるのである。学校が軍隊式教育の実践の場ということで、その傾向にますます拍車がかかる。「男らしくなる」ということは狂暴になるということ、つまりいわれのない暴力を平気でふるうということであり、自らの最も醜悪な面を誇示し合うことである。しかしその背後には、深い孤独感と不安と恐怖が潜んでいる。「ボア」が野良犬に示す優しい気持ちなど、他人に見せようものなら恰好の餌食になってしまうのだ。他人に心を開き、互いに理解し合いたいと願っても、それはにべもなく拒否されてしまう。「奴隷」がアルベルトに「君はぼくのたったひとりの友だちだよ。今まで知りあいは何人かいたけど友だちはいなかった。むろんそれも外の話で、ここではそんな者さえいなかったんだ。一緒にいて、楽しく話していただける友だちって君だけだよ」(p. 136)というとき、アルベルトは「なんだよ、それ。まるでおかまの告白みたいだぜ」(p. 136)と真面目に取り合おうとしない。

学校当局の態度も若者達を失望させこそすれ、彼らのやり場のない状況を救うものではない。軍人達は古めかしい権威や価値に固執し、若者達に古い世代と同じ道を歩ませようとする。しかも、指導している士官自身はその教育内容に確信を抱いているわけではないのである。

若者たちは学校で叩き込まれる規律がにせ物だということを直観的に見抜いている。だが、彼らはそうした秩序を変革しようとはしない。暴力を行使して反抗するにとどまっているのである。反動としての狂暴化からは何物も創造することはできない。自分が強者になりさえすれば目的は達成された、と彼らは考える。このような思考が、因襲の枠を一步も超えていないことに彼らは気がつく由もない。大人が無形の暴力で支配を確立しようとするのに対し、若者は有形の暴力を行使して他者の上に立とうとする。両者の思考の根本は同一である。かくして、若者達は相互理解も友情も見出せない世界で、失意の中に生きるべく運命づけられるのである。

この世の至る所には畏が張りめぐらされ、虚偽が満ち満ちている。大人はそれを承知で行動する。若者はそれに反抗し、大人たちは規範という目に見えぬ暴力で強引に彼らに自分達と同じ道を歩ませようとする。

士官学校の新入生が上級生のしごきの儀式を経るのと同じく、若者達は通過儀礼としてのレオンシオ・プラドでの体験を経て大人になっていく。バルガス＝リョサのこの作品は、青春というにはあまりに苦渋に満ちた時期を通過しなければならない若者の文学なのである。

「私もかつて二十歳だった。あれが人生のいちばん美しい時期だとは言ってくれるな」 ポール・ニザン (第II部のエピグラフ)

山 蔭 昭 子 (神戸商科大学)